

インド・ビハール州立

四研究所の現状

——ナールランダ・パーリ研究所——

長崎 法潤

はじめに

光栄に輝く学問研究を再現する意図のもとに、インド・ビハール州政府は、今より十四、五年ほど以前に、学問の歴史と深く結びついたそれぞれの場所に、五つの研究所を設立している。佛教学研究を目的に、ナールンダ大学遺跡の近辺に創設されたナールンダ・パーリ研究所、ナヴァニヤが盛えた北ビハールのダルバンガにサンスクリット研究のために Mithila Institute of 考古学の研究所としてパトナに K. P. Jayaswal Research Institute、チャイナ教々祖マハーヴィーラの生誕地バイシャリにあるチャイナ教及びチャイナ・ブラクリットの研究所 Vaisali Institute、それに、少し目的が異なるが、ヒンディー語研究のためにパトナにある Bihar Rashtira Bhāṣa がそれら五つの研究所である。

一九五九年十月から一九六四年三月まで、私はナールンダ・パーリ研究所において学ぶ機縁に恵まれ、その間、Bihar Ra-

shtra Bhāṣa を除き、他の三研究所を何回か見学することが出来た。これらの研究所は、開所して日は浅いけれども、最近インド学、佛教学の分野に属するテキストの出版等を含めて、著しい活動が続けている。第一号及び第二号にわたり、それら四研究所の現状について若干の報告をしたい。

一、ナールンダ・パーリ研究所

五世紀より十二世紀にわたり、全インド及び東南アジア、支那から多くの学僧が佛教学研究を目指して集ったナールンダ大学を再現するために、大学遺跡に近い Indra Pushkarini の名を持つ美しい池の堤に、ナールンダ・パーリ研究所の foundation stone が、当時のインド大統領ラジエンドラ・プラサードによって置かれたのは、一九五一年十一月二十日である。一九五六年三月二十日、当時のインド副大統領ラダクリシュナン博士（現インド大統領）を招き、研究所の竣工式が挙行され、その日をもって公式に開所された。研究所は、ナールンダ学問寺に因んで、Nava Nalanda Mahavihara（新ナールンダ大寺）と名づけられた。東南アジアのテーラヴァーダ佛教国に隣接する関係上、パーリ佛教学コースのみを設けている性格から、ナールンダ・パーリ研究所 (Nalanda Pali Institute) とも称され、むしろその名称で一般に呼ばれている。

初代所長を、研究所創設のために功のあったインド人佛教学僧 Bhikkhu Kassapa（現ベナレス・サンスクリット大学パーリ佛教学主任教授）が勤め、その後継者として、カルカッタ大学

を定年退官した Dr. S. Mookerjee が迎えられ、一九六四年七月に退官された。それ以後所長のポストはあいており、バイシヤリ研究所所長タティヤ博士が所長代理を兼任している。

研究所は、私の滞在中、ムザファルプールにあるビハール大学にアフィリエイトしていたが、一九六二年、ガヤにマカダ大学が開校されると同時に、それにアフィリエイトすることになった。従って、現在、M. A. Ph. D. のディグリーはマカダ大学より授与される。

研究所には二年間のパーリ佛教学修士課程が設けられている。東南アジアの佛敎国からの比丘は、僧院においてパーリ佛敎を研學し、佛敎學の高い知識を身につけながら、近代的大學制度の學歷を持たないから、彼等は三年間在籍の義務がある。その間、K. S. Sanskrit 大學(在ダルバンガ)のパーリ・フーチャールヤ試験とマカダ大學の Special English Examination (B. A. スタンダード)を受けなければならない。パーリ・フーチャールヤは、答案をパーリ語で書かなければならない高度の試験である。

M. A. の試験は、マカダ大學において、パーリ語文法、アビダルマ、佛敎史、アッタサーリニー、俱舍論等八課目を一日おきに十六日間にわたって行われる。一課目につき、五題の問題中二題を各自に選び、三時間で書かねばならない論文形式の問題である。答案は、英語、パーリ語、ヒンディーのうち、どの言葉で書いてもよいことになっている。試験の前に五十頁の論文を提出せねばならない。

研究所にはリサーチ・コース(ドクター・コース)も置かれている。入学許可のあった学生は、指導敎授と相談の上、書こうと希望する博士論文(パーリ佛敎に関する研究のみに限らない)の題目とスィノプシス(要旨)とをビハール大學に提出し、大學によって認められた日より二年後に論文を提出する權利を得る。

その他、梵語、ヒンディー、中國語、日本語、チベット語のディプロマ・コース(二年間)が設けられている。ここに日本語も含まれているのは、佛敎學研究のためには日本語の知識も必要であると主張するムケルジー博士の意見によるもので、日本の佛敎學研究の高い水準がインドの學者によってもそろそろ認められつつあることは喜ばしい。

次に、研究所のスタッフ及び彼等の研究成果について報告しよう。私の滞在中所長の職にあった Dr. Satkari Mookerjee はインド哲學、殊にインド論理學の碩學である。彼の著書として先ずあげなければならないのは、彼がカルカッタ大學に提出した博士論文を基礎にして書いた The Buddhist Philosophy of Universal Flux (An exposition of the philosophy of critical realism as expounded by the school of Dignāga, University of Calcutta, 1935) である。その他、彼の著書として The Jaina Philosophy of Non-absolutism (A critical study of Anekāntavāda) ほかタティヤ博士と共著の Hemacandra's Pramāṇa-mīmāṃsā (A critique of Organ of knowledge, translated with critical notes) がある。

リサーチ・プロフェッサーであった Dr. Nathmal Tatia は、一九六一年にバイシャリ研究所々長に就任し、上述のように、ムケルジー博士の退官後、ナールンダ・バーリ研究所々長代理を兼任している。彼はチャイナ教の専門家であり、カルカッタ大学に提出した博士論文 *Studies in Jaina Philosophy* (Jaina Cultural Research Society, Benares, 1951) を出版している。ナールンダに滞在以来、佛教学に興味を示し、説一切有部に関する論文もある。

一九六一年、デリー大学の佛教学科主任教授ハハット博士が定年退官後、ヨーロッパ博士が主任教授に就任し、Dr. Jinananda は Assistant Professor のポストにアポイントされてナールンダを去った。彼はロンドン大学に律に関する博士論文を提出している。彼には *Upasampadājñapti* (Tibetan Sanskrit Works Series, Vol. VI, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1961) の校訂出版がある。

セイロン出身の佛教僧 Dr. U. Dhammaratna はバーリ佛教の権威者である。彼は俱舍論、テラガータ、ヴィバングの講義をしているが、*The Samohavinodani* (The commentary on Vibhaṅgappakarana, Nava Nalanda Mahavihara Granthamālā, 1953) の校訂出版がある。

Dr. Mahesh Tiwary はバーリ佛教の講義をしている。彼は涅槃論に関する学位論文をヒンディーで書き、今年出版予定と聞いている。彼には *Saddhammasaṅgaha* (Nava Nalanda Mahavihara Granthamālā, 1953) の校訂出版がある。

インド佛敎史を講じている Dr. C. S. Upāsaka は、ロンドン大学に提出した博士論文 *The History and Palaeography of Mauryan Brahmi Script* (The Nava Nalanda Mahavihara Research Publication Vol. III) を出版し、*Sāsanavamsa* (Nava Nalanda Mahavihara Granthamālā, 1953) の校訂出版もある。

一昨年よりティーチングスタッフに加わった南ベトナム出身の佛敎僧 Dr. Thich Minh Chau は、ナールンダで中阿舎とマッジ・ニカーヤとの比較研究を行ひ、ビハール大学に論文を提出した。彼は昨年南ベトナムに帰国し、それをサイゴンで出版 (*The Chinese Madhyama Āgama and the Pāli Majjhima Nikāya, A comparative study, the Saigon Institute of Higher Buddhist Studies, 1964*) している。わが国の専門学者にはそれほど教えるところもなさそうだが、その方面の研究は英語であまり発表されておらないから、外国では高く評価されるであろう。彼は漢文を良く読み、主としてその方面の研究を行つており、Hsuan Tsang (The Pilgrim & Scholar, 1963) すなわち、玄奘に関する著述と、*Milindapañha* and *Nāgasenabhiṣṭhūtra* (a comparative study, 1964) すなわち、漢訳二本の那先比丘經とバーリのミリンダパンハとの比較研究を出版している。彼は意欲的な学者で、現在サイゴンの佛敎研究所々長として活躍している。

ハンディヤット Brahmananda はティーチングスタッフではないが、所員として、*Mahābhāṣya* をヒンディーに翻訳中であ

る。彼のサンスクリット文学法に對する深い知識は他に見られないほどである。

最後に研究所の出版物をここにまとめて紹介しておきたい。

まずパーリ大藏經のデーヴァナーガリー文字による出版をあげなければならぬ。これは政府の援助のもとで、カシャ・比丘が General Editor として、サルナートに本部を設け、P・T・S、シャム版、セイロン版、ビルマ版、カンボジャ版をもとに校訂したもので、一九六二年の春、全巻の出版を完了している。P・T・S 本がなかなか入手し難い現在、廉価でパーリ大藏經が入手出来るようになったことは専門学者を喜ばしている。それに、インドの出版物には珍しく誤植が少いことを付記しておきたい。一九六三年よりムケルジー博士が General Editor として、パーリのアッタカタがデーヴァナーガリー文字で出版されることになり、すでに Samantapāsādikā が Sharma 氏の校訂によって昨年秋出版された。

研究所は The Nava Nalanda Mahavihara Research Publication (研究報告) を出版している。研究所における多くの学者による論文を集めたもので、その第一巻(一九五七年)には、京都大学梶山雄一助教授の論文 (Bhāvavivēka and the Prāsaṅgika school) も発表されている。第二巻(一九六〇年)には、わが校部建助教授の Abhiḥarmavātara by an unidentified author と題する論文も含まれている。第三巻は、すでに紹介した The History and Palaeography of Mauryan Script by C. S. Upāsaka (1960) である。第四巻は、ムケル

ジー博士と私によるプラマナーナワールディカ第一章自比量 (svārthanumāna) の英訳 (An English translation of the Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocommentary, with elaborate comments, 1964) である。法称の自註を含めて、カリカー五一 (Gnoli 本) までは英訳し、多くの註を付しておいた。読者の便宜を考慮のうえ Gnoli 本と Malvaniya 本とをもとに校訂したテキスト(英訳した部分のみ)をデーヴァナーガリー文字で英訳の後につけた。もう一つの出版物 Nava Nalanda Mahavihara Granthamālā には、前述せる校訂出版 (1) The Sammohavinodanī, the commentary on Vibhaṅgapakaraṇa ed. by U. Dhammaratna, (2) The Saddhammasaṅgaha, ed. by Mahesh Tiwary, (3) The Sāsanaṅgama ed. by C. S. Upāsaka が現在までに出版されている。

カルカッタ大学やデリー大学には佛敎學の講座が設置されているが、佛敎學研究のために一つの研究所をナールンダに創設したことは、ヒンズー敎の社會にあつて意義深いものを感じしめる。私がナールンダを去る頃、大乘佛敎の講座も創設するか、玄奘記念研究所(ナールンダ大學遺跡より約一マイル東部に建築中)の完成とともに、両研究所を併合の上、ナールンダを佛敎學のセンターにしようとする計画も進められていた。その後のニュースについてはまだ何も聞いておらないが、アジアにおける佛敎學のセンターとして、ナールンダが再び繁榮する日が訪れることを衷心より祈りたい。(一九六四・二・二六)